

ワークショップ 表現活動と子育てを考える：

パフォーマンスと討論を通じて

阪上 雅昭

(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

2013 年 2 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

GCOEワーキングペーパー

京都大学における男女共同参画に資する調査研究

ワークショップ 表現活動と子育てを考える：パフォーマンスと討論を通じて

人間・環境学研究科 阪上雅昭

1. 企画の目的

本企画（ワークショップ）は、子育てをしながら優れた表現活動を行っている芸術家たちによる、同じ子育て中の母親（父親）と子供を主な対象とした調査研究である。家庭（親密圏）と公共圏での協調的で優れた活動を行っている芸術家のパフォーマンスを紹介することで子育て中の母親（父親）を刺激し勇気づけることを目的とするとともに観覧する親子の観察をおこなった。芸術家、ユニット協力者、イベント参加者が、子育て・介護・仕事等での喜びや悩みについて、自由に気楽に語り合える場を設け、そこから各自のもつノウハウや抱えている問題を自然な形ですくい上げることによって研究データとする。

2. 企画の方法

優れた芸術家である中ムラサトコ（唄、足踏みオルガン）は、昨年（平成23年）8月に4人目を出産した子育て中の母親である。また通常の音楽活動以外に、“オトのサンポ”という、母親と子供がともに楽しめるワークショップを開催している。また、アサノカサネと共同で2～3歳児向けの“ぐるぐる”というおしばいを上演している。また中ムラサトコの地元である寿町は、日雇い労働者が高齢化した、いわば巨大な老人介護施設と化した町であり、彼女はここでスープカフェを運営し、地域の交流を促進し活性化する活動を行っている。

本プロジェクトでは、親密圏と公共圏にまたがる協調的で生産的な彼女たちの活動を、子育て中の母親（父親）に紹介することで参加者を刺激し勇気づけるとともに、調査することを目的として“オトのサンポ”と“ぐるぐる”の公演を京都大学で実施した。研究は、親密圏と公共圏にまたがる諸問題に直面している母親（父親）に直接働きかけるという方法をとるところに特徴がある。

また“ぐるぐる”公演の後は参加者と公演者さらにユニットメンバーによる“おしゃべり”の場を設け、公演についてさらに子育てや仕事について自由に話し合い、本音を引き出すことを試みた。



3. ぐるぐる公演について

おしばい“ぐるぐる”は、2～3歳児とその母親（父親）を対象とした、せりふのないパフォーマンスである。図のように一部を切り取った円型のカーペットの上に観客が座る。子供は親のひざの上で安心しておしばいに集中することができる。観客は円上に座るので互いに顔が見えるようになっている。周囲の子供が集中していくようすが目の辺りにできるのが、素晴らしい。パフォーマンスはカーペットの内側の円形の領域およびカーペットの外側で行われ、この視線の切り替わりもとても楽しい。口琴・カリンバ・太鼓などの楽器とボイスパフォーマンスで、たべる、わらう、ねる、なく、おこるを遊ぶパフォーマンスである。この“ぐるぐる”のが本研究の最も重要な部分であるので、動画資料として提出する。

4. 成果と問題点

ぐるぐる公演後のフリートークの内容について簡単にまとめておく。まず、身振り、音楽そして擬態語だけでセリフをいっさい使わない2～3歳児を対象にした“ぐるぐる”の評価は非常に高かった。子どもがすぐに“おしばい”に集中し普段とは違う表情・反応で楽しんでいるようすはとても印象深かつと言う感想が多かった。いわゆる、お遊戯のような子どもへの働きかけを想像していた参加者には予想外の内容と反応で、これから子どもと遊ぶときの参考にしたいと言う意見など、子どもとの関わりあい方について刺激を与えられたようである。また公演者が、表現活動と子育てを両立させていること、さらにその両立がスープカフェなど地域を活性化する活動の中で育んだネットワークによって支えられていることなどが印象に残ったようである。これは“他の大人に育ててもらおうという考えが素晴らしい”という感想に集約されると思われる。当然ではあるが、参加者の反応は子育てのやり方についての話題に敏感であり、孤立した中で迷いながら子育てをしている姿が垣間見えた気がしている。

インフルエンザでの欠席等を除いて全部で17組の参加があったが、その中で父親が参加したのは4組（父親のみは1組）であった。これでも、日曜日の公演ということで父親の参加は多い方だそうである。公演中は母親が子どもを膝の上に抱き、父親はその後ろに控え、フリートークでの自己紹介のときも母親が自分と子どもそして父親を紹介するという姿が印象的であった。

以上、“オトのサンポ”，“ぐるぐる”の実施やフリートークによって子育て中の母親（父親）を刺激し勇気づけるという目的は十分に成功したと考えている。しかし、フリートークでは参加者は聞き役に回ることが多く、参加者の想いや悩みを語らせるには至らなかった。このような一過性のイベントでは本音を語らせるのは困難であることを痛感させられた。

2011 年度京都大学における男女共同参画に資する調査研究「女性表現者の公演企画と活動調査」（研究代表：阪上雅昭）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2011 年度プロジェクト時点

阪上 雅昭（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

林 久美子（京都橘大学文学部教授）

田村 うらら（京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（科学研究））

平野 知映（京都嵯峨芸術大学芸術学部助手）

竹本 友香（女義太夫の語り手）